

就職活動用衣服に対する意識の企業と学生間の対比  
文教大教育 ○伊地知美知子, 田中千代学園短大 小田巻淑子  
共立女大家政 小林茂雄

<目的> 就職活動用の衣服は着用目的が明確であり、また着用場面が限定される点で通常の衣服とは異なっている。本研究では、採用者側の企業が就職活動用衣服をどのように考えているかについて調査し、前年度に発表した被採用者側の女子学生の考えの結果と対比しながら、両者の関係について考察した。

<方法> 女子学生の就職活動用衣服としては、オーソドックスさの程度を配慮しながら14サンプルを選定し、カラー写真の評価刺激を作成した。これらの評価刺激について銀行、メーカー、マスコミなど業種の異なる企業の人が、面接時の就職活動用衣服の好ましさをどのように考えているかを、4段階尺度を用いて評価してもらった。また、面接時の服装や化粧などに対する考えについても回答してもらった。なお、女子学生については就職活動期の女子大生及び女子短大生を対象に、銀行、メーカー、マスコミなどの業者別に同じ評価刺激を用いて就職活動用衣服のふさわしさの程度を同様に評価している。

<結果> 女子学生の就職用衣服のふさわしさを業種別に解析した結果、(銀行)、(メーカー・商社・旅行サービス)、(マスコミ・アパレル・航空)の3グループに大別されたので、企業側の評定データをこの3グループに準じて大別し考察した。女子学生の業種と就職活動用衣服のふさわしさの評価と、企業側の好ましさの評価はほぼ同様の傾向にあったが、全体的には企業の方が許容範囲がより広いことが示された。しかし(マスコミ・アパレル・航空)のグループにおいては、女子学生より企業側の方がカジュアルなタイプの衣服に対して逆の反応を示した。